



読字 原田 鏡

No. 661

2012/2/15

日中友好新聞

発行所
日本中国友好協会
〒113-0033 東京都文京区
西神田1-1-1073C1階

日中友好協会
岡山支部
〒703-8256
岡山市東区3-8-30 514
TEL:0861272-3010
郵便番号1100
01250-04-3835

日中友好協会
倉敷支部
〒713-8911
倉敷市遊島中央1-8-4
(宮地方)
TEL/FAX:0861416-2711

日中友好協会岡山支部ホームページ
<http://rizhong.biz/>
メールアドレス
rizhong86@hotmail.co.jp



「落葉帰根」



どんなに大きくなっても 生まれたところに戻りたい

2月7日、高島公民館主催で中国帰国者の体験を聞く会「がひらかれました。帰国者の方や日本語教室の講師、地域の方など35人が参加しました。

この日話をされた帰国者の高杉さんは、1941年旧満洲国三江省で生まれました。3歳のときに、お母さんと弟さんと3人で夜、雨の降る中、山の道を500人くらいの人と、馬車を80台で出発したそうです。

そして麻畑のなか、体中蚊に刺されて泣いていた高杉さんを見つけられました。そして残留孤児として生きていかれます。私は体験談を聞くたびに、「以前放送されたNHKの「大地の子」や「遥かなる絆」の通りで、どうしてこんなに悲しいこととおきたのかと、言葉にならない思いでいっぱいになります。でもそういう話をされた事でも高杉さんが、私の養母は、とても優しい人でした。毎年冬が来る前に手袋と綿入れの靴、帽子を早めに用意してくれました。だから私は今まで、凍傷をしたことがありません」といわれた時の高杉さん、とても誇らしげで、輝いて見えました

また、この会は月に2回、高杉さんの日本語講師である成田さんが、話を聞いて帰ってからパソコンをうち、次の時に2人で校正しては又聞くという、地道な努力をされて、高杉さんの手記ができ、この会を開く事が出来たのです。

成田さんの「殺さなければ殺される、それが戦争というものです。だから憲法9条は守らねばなりません」という言葉から、成田さんだつたから、高杉さんも話されたのだと。このお2人だつたからできたのだと思いました。高杉さん、成田さん、本当にお疲れ様でした。

貝吹佳代子

日本語教室で学ぶよるいび

2月4日、勤労者福祉センターで、岡山県地域人権問題研究集会の第2分科会「教育―格差と競争」での、中国残留孤児の高杉久治さんの報告を紹介します。

バス、電車にも乗れず、テレビを見ても分からない。病院に行っても病状が説明できない。そんなとき、2004年に残留孤児訴訟を支える岡山の会が、日本語教室を立ち上げてくれたそうです。

たどたどしいながら一生懸命に報告する高杉さんの姿は感動的でした。

日中岡山理事 河井伸士

「新春 お茶とうたの集い」を開く 日本語教室くらしきの会



節分の二月三日(金)、日本語教室くらしきの会「は、笹沖の健康福祉プラザで、お茶とうたの集い」を持ちました。教室が出来て五年近くになります。初めての出発のフェアーとなりました。日本のうた、中国のうたを歌い盛り上がりしました。中国語を勉強している人もエレキを持って参加して下さり、ビートの効いた伴奏でバックアップ。お茶とお菓子を食べながら、自己紹介をして交流しました。すんだところでビンゴゲーム

山縣

月曜午後6:30 初級講座を訪問

谷川浩文

月曜日夜の初級講座にお邪魔した。担当の先生は馬先生である。この日も冒頭から「往心里去」と「放在心上」の二ユアンスの違いを言葉巧みに先生のいつもの例え話、はたまた経験談??で分かりやすく説明してくれる。文法を説明させたら馬先生の右に出るものはいないだろう。どこのクラスにも雰囲気というものがあるが、このクラスは静寂に包まれた教室で、誰かがぼつりと何かを呟くと、それを返歌(アンサーリングソング)の如くユーモラスに誰かが返す。「このクラスの人は皆、仲がええんよ。」と、受講生は誇らしくそう言った。異種独特な雰囲気醸し出すこのクラスは、私にはとても居心地がよく感じられた。

この日の文法の授業は様態補語・結果補語・可能補語の説明であった。これらの項目はHSKでも中国語検定でも頻出な位重要なので、皆、一生懸命例文を作ったり、先生の解説を熱心に聴いたりしていた。「買」を一つ例に挙げると、それ一文では、「買う」という動作しか表わさず、補語を補うことでその結果が明らかになるようだ。正に補語を制する者は中国語を制したも同然と言っても過言ではなからう。

授業も終わりに近づいたころ、医者」と患者に分かれて、ロープレが始まった。とても的確に病状を説明したり、医者の方の方は本物さながらに演じていた。我々中級もうかうかしてはいられない。そう危機感覚えた一日であった。

「内モンゴル自治区」への旅 9

坪井あき子

バスの窓外は、牧畜の民の地。ただ草原がひろがっているばかり。その中をまっすぐ一本の道路が通っている。時々、牛の群れが道を横ぎるのでバスが止まる。牛たちの大地を人間がさげすんでしまったのだ。

1939年(S、14)6月11日から9月15日まで国境をめぐって双方の正規軍にそれぞれ2万人の死傷者・行方不明者を出したといわれるノモンハン戦。戦争があった地域の80%が今はモンゴル共和国側で、あとの部分が中国領だそう。

ニホン人は、なぜ、ニホン語をおしえることができるのか? ⑦

竹内和夫



人間の赤ちゃんは、おなかの中でお母さんの声をききわけている。生まれてから、ずっとニホン語の音をきいていると、たくさんある言語のうち、ニホン語に必要な音以外は学ばずにすててしまう。文法もしかり。

中国帰国者が10歳ぐらいまで、おとなの中国語の世界にいれば、中国語の脳になってしまうのは当たり前。

この母語は一生忘れられない、別の言語を習うときは、脳の弱い電流(脳波)の流れを切りかえればよい。

赤ちゃんは自分の力で、からだで実践的に、その言語の音のきまりを発見し、文法を発見する。赤ちゃんの好奇心に学びたい。大人は赤ちゃんにもどれない。いくら聞いても、それだけでは、よその言語を手に入れることはできない。

すでにある母語の法則から別の言語の法則へスイッチを切りかえる必要がある。脳細胞は十分にこれにこたえる力をそなえている。ひとりの脳は、ビルひとつ分のコンピューターにたとえられ、200年も使えるという。左右の脳半球、耳、目、手、足、指、おっぱい、臓器など、見事に対照的で、言語の構造と体系に反映している。

おとなは、赤ちゃんよりずっと発達した脳をもっているから、新しい音韻体系や文法構造を、まとめてきちんと学ぶことができる。

研究によると、日本の赤ちゃんの発音の発達順序は、パバ→マ→タダ→ンニャ→カガ→ワ(以上2才までに)→チャ→シャ→ジャ→ハヒフ→ツズ→サザ→ラ(以上4~5才までに)という。

参考 岡本夏木『子どもとことば』岩波新書 1982、
大久保 愛『乳幼児のことばの世界』大月書店(初版1993)
山鳥 重『言葉と脳と心』講談社現代新書 2011



つづく

の建物がある。諾門罕戦役跡陳列館」と横書きで、刻まれている。建物には愛国主義教育基地」というプレートが貼ってあった。
入場者は私たちだけ。日本語のできる男性職員が案内してくれた。ガイドの董娜さんも初めてきた、という。
館内には、人形による死闘の様子が表示されている。胴体のまん中からちぎれた死体や、血まみれの兵や……強化ガラスの下にも戦場があつて上からのぞいてみるようになってる。
当時の軍服、帽子、鉄かぶと、



諾門罕戦役跡陳列館の入口

鉄砲類、飯盒、メガネ、万年筆、時計……。

現在の「友好」交流の写真などもあるけれど……私は董さんにあの当時、日本にも中国大陸侵略反対、と主張した人びとがいたのです。でもそういう人たちは牢屋に入れられたり殺されたりしたんです」と。彼女が答えた。知っています

東日本大震災へ

支援募金

本部へ7回目を送る

まもなく大震災から1年になろうとするのに、除染や仮設住宅など企業に丸投げで、この寒さとたたかっておられる人たちが。岡山支部は太極拳の人たちを中心に、去年4月から支援募金を本部へと送ってきました。第7回目¥15,222円(合計¥130,462円)になりました。今後ともよろしく。
今回はSさんから1円玉350枚、5円玉70枚をふくむ重たいカンパをいただきました。ありがとうございます。

竹内和夫

『人民中国』の寄贈がありました

南京の三江大学で日本語を教えていらつしやる曾田和子さんから、『人民中国』の寄贈がありました。

今回の寄贈ナンバーは2010年7月号から2011年12月号までです。おもしろい、参考になる記事もありますので、ぜひご覧ください。ぜひほしいという方には差し上げますのでお申し出ください。

なお、曾田先生は、天権 21

「同学3人・マレーシアの旅」1

(2011年12月18日~23日)

中国語講座火曜日クラス 平岩博子

2011年12月、暮れの慌ただしさも間近に迫ろうという頃に台湾を旅したメンバーでマレーシアを旅することになりました。中国語圏であることを条件に目的地を一任された私は、リタイヤ後の移住地として頼に人気の高まりを見せるこの国に興味を覚え、今回の旅先に選んでみました。日本から7時間で行ける熱帯の国、時差も1時間で。さて、今回はどんな旅が私たちに待っていてくれるのでしょうか。冬衣装で日本を飛び立ち到着したマレーシアの首都クアラルンプールは、気温28℃という暖かさでさっそく空港で衣替えです。半袖姿になり気分もウキウキと浮かれ、すっかり空港内で迷子に……。ようやく集合場

所を探しあてると、そこには広東省出身の中華系ガイド、マイケルが待ち受けてくれていました。彼は日本語、英語、マレー語が堪能、もちろん中国語は言うに及びません。きけば日本に住んでいたこともあるうえ奥さまも日本人とのこと、納得です。
ホテルに向かうバスに乗り込んだのは夕方6時半をまわっていました。空にはまだ太陽が明るく輝いていました。

次回の新聞送付作業は
2月21(火)午後1時半~
民主会館2階で行います。
前回お手伝いくださった方です。

稲葉 林
小竹 内和
竹内 袈

